

# 医人伝

自分は本当にかんなのか、治療法は正しいのか。そんな患者の切実な声が全国から寄せられる。メールで、手紙で、電話で。勤務時間外に会って話を聞くことも。患者の組織や細胞の検体を送ってもらい、病理診断の「セカンドオピニオン」として自らの意見を述べる。すべて無償のボランティアだ。

「質問に丁寧に答えることで患者が納得し、前向きに治療に取り組みやすくなる」

病理診断は病理医が患者の細胞、組織などを肉眼や顕微鏡で調べ、がんかどうかや悪性度を判断。結果に基づいて治療方針が決まるが、患者に説明するのは主治医のため、患者と接する機会はほとんどない。

ボランティアに取り組むのは「患者に顔が見える病理医になる」との思いから。最初に患者が受けた診断と同じになり、それらを分かりやすく説明するこ



がん経験者のピアノ伴奏に合わせ、オーボエを演奏する堤寛さん＝名古屋緑区

藤田保健衛生大(愛知県豊明市)

第一病理学教授 **堤 寛さん**(63)

患者に「この点をじっくり聞いてみたら」と助言したりする。きっかけは前任地の東海大医学部(神奈川県伊勢原市)に所属していた二十年近く前。医師の立場で加わった全国の乳がん患者会のメーリングリストで、治療への不安を訴えるメールが山のように届いた。外来の短い診察時間では主治医の十分な説明がなく、「こんなことを聞いたら嫌われるかも」との遠慮も多くの患者に共通していた。

とは多いが、異なる意見や誤診が疑われるものも。その場合は直接主治医に意見を伝えたり、

丁寧な病理診断しても、それが十分に伝わっていないもどかしさ。専門は感染症だが、分かる範囲でメールや、患者団体が主催する講演会の後で医療相談や無料のセカンドオピニオンに応じるように。二、三時間も話を聞いたり、亡くなるまで二年間、メールでやりとりしたりしたこともある。

横浜市出身。医師を志したのは「何となく」だったが、「せっかく学んだ医学の知識を生かしたい」とすべての病気に関われる病理を専門に選んだ。地元のがん患者支援団体に加わり、趣味のオーボエを生かし、がん経験者と共演するコンサートも開催。全国の病理医らでつくる「日本病理医フィルハーモニー」の団長も務め、五月には名古屋で演奏会も開く。「医療も音楽も皆でつくり上げるのも医師が患者さんの中に積極的に入っていくことで、医療への不信感も緩和されれば」

(山本真嗣)

## 患者が頼れる病理医に

**掲示板**

◇中部臨床栄養研究会 0円。市民講座 14日後2(68)16、名古屋千種区今池 P.O.愛知1、今池ガスビル。「透析導入を遅らせるための腎不全の食事療法」をテーマに出浦照昭 杉町、大和大客員教授が講演。前11後1 神医療はでんぶん製品試食会。患者と家族は1人1000円、一般300 回復支援

## くらしの作文

2015.3.10

珍しく体調を崩し、休暇を取って家にいた。誰とも話さず、テレビもつけず、ぼんやりしていると、登校する小学生たちのおしゃべりや笑い声が聞こえてきた。

《ああ小学生たち、元気でいいな》

通勤するとき見かけるおばさんも、いつものように歩いていった。その人は多分、私より少し年上で、足が不自由なのだろう。前のめりでバランス悪く歩く。でもいつ見ても、一生懸命歩いていく。

それから、外国人の女子中学生。制服の上から、イスラム教徒の女性が着用するヒジヤブをかぶっている。学校で誰かに何か言われないうち